「心に記された律法」

２０１６年１１月２０日
西九州伝道所　佐々木正
明

はじめに　　「うう・・・・ん。残念！」

伝道者生活を50年も続けていると、臍を噛むような思いも重ねてきました。いま思い出すのは、１９７０年代の初めころ、宣教師になる訓練のために一人勝手にマニラで勉強していた時のことです。土地の新聞であったかクリスチャンの雑誌だったかさえ、記憶が定かではないのですが、だいたい、以下のような内容の記事を読んだのです。

イギリスのある世論調査会社の発表によると、世界中の国々の中で、最もキリスト教が盛んなのは日本だということでした。もちろん、多くの人々がこの調査結果を笑いものにしました。そのころの日本のキリスト教は、今よりはまだ勢いがあったにせよ、怪しげなキリスト教団体も含め、すべてのクリスチャンと呼ばれる人々を総まとめにしても、総人口の１パーセントにも足りなかったからです。そしてそれは、クリスチャンだけにではなく、ちょっとした知識人の間では、日本でも海外でもよく知られた事実だったからです。

ところがその会社は何の躊躇もなく、自分たちの主張をしました。「私たちが言っているのは、国民の何パーセントがクリスチャンかという問題ではなく、その国の文化、習慣、経済構造、政治形態、社会倫理、人々のものの考え方と道徳観など、国民を取り巻くおおよそすべての事柄を全般的に調査して、その国にキリスト教の精神がどれだけ浸透し、受け入れられ、実践されているかを問うものである」と。

この会社の主張によると、日本のキリスト教の浸透の度合いは６５パーセント、それから確かドイツが６０パーセントと続き、スカンジナビア諸国がそれを追い、国民の６０パーセントが教会に出席し、４５パーセントはどこか教会に教会員として登録いているといわれているアメリカは、わずか４５パーセントていどだったと記憶しています。

いま、まさに臍を噛む思いで悔やんでいるのは、このとき、私は読んでいた記事が新聞だったか雑誌だったかも確かではなく、記事の細かい内容も、自信をもって言うことができない曖昧なものであるということです。当時の私は宣教師としてアジアの国で働く決意で、慣

れない英語と格闘していたために、日本についてはほとんど関心がなかったのです。だから、「へー・・・」と、軽く読み飛ばしてノートにもとらず、コピーすることなど思いも及ばなかったのでした。もっとも、当時はまだ便利なコピー機などは存在しませんでしたので、当然といえば当然のことでした。それにしても・・・・返すがえすも残念です。

いま長い宣教師生活を終え、日本の片隅で開拓伝道に携わりながら、異邦人の国日本の宣教について考察を重ねるようになって、あの時ノートを取っていなかったことが、悔しくてならないのです。このような曖昧な記憶を文章に用いていては、それだけで文章の価値がうすれ、信頼性が失われてしまうのです。

ただし私は、多くの人たちがすでに言っていることをたくさん引用し、それらの思想をまとめて書き上げる論文などには、ほとんど何の興味もありませんし、勧められても読む気が起こりません。そこに何らかの斬新的な発見か提案がなければ、私には価値のないものです。ですから今書き始めたこの文章も、多くの人達が語っている定説や、常識になっているような神学をまとめ上げるだけのものならば、なんの価値もありません。書くほうも読むほうも時間の無駄というものです。書くには書くだけの価値のある発見や提言が必要です。

イギリスの調査会社が発表したことは、私が論文を書こうとしているならば、取り上げないほうが無難です。でもこれには、宣教論的に、特に異邦人の宣教ということでは、非常に重要な示唆が含まれていて、絶対に無視されてはならないものです。またその重要性は、実は正当な聖書の学びからも証明されるものです。ただ、西欧のキリスト教神学では、これが全く無視されてきたというか、気づかれずのきてしまったといえるのです。それが、日本の宣教の大きな妨げとなっていると判断するのです。

Ｉ.　人間というもの

西欧の正統的キリスト教の教えでは、人間の罪の性質がことさらに強調されます。アダムとエバが犯した罪の結果、人間には「原罪」といわれる罪の性質が入り込み、その罪の性質のために、すべての人間が罪人となり、悪魔に支配され、神に敵対して歩み、神の怒りの対象であり、ただひたすら滅びに向かって歩み続けなければならないというのです。罪に陥った人間は神から追放されて神を離れ、神の祝福を失い、神の前には何一つ良いことができず、自分を救うこともできない、まったくの無力な存在となったというのが、私たちが教えられてきた西欧キリスト教による人間観です。

だから、人間はただ神の愛と哀れみによるキリストの十字架の贖いを信じ、神が一方的に

与えてくださった救いの恵みを、感謝して受け取らなければならないと教いうのが、少なくても伝統的な西欧キリスト教の教えです。そして私も、すべての人間が罪人であるという理由が、アダムとエバの罪に遡る「原罪による」という点は信じていませんが、すべての人間が罪人であるという聖書の教える事実が、アダムとエバの罪に遡るということは認めています。私も西欧キリスト教の教えのほとんどを、聖書の教えのより良い解釈として認めているのは事実なのです。

ところが聖書の中には、西欧キリスト教では見落としている教え、ほとんど触れられていない大切な教えがあるのです。肖像画を描くとだれでも、美しく立派な顔や姿を描きます。レンブラントが肖像画を依頼されて、夜警という有名な絵として描き上げたとき、依頼者たちは非常に立腹したということです。日常の生活の中に肖像を埋め込んでしまったからです。ましてや肖像画を頼まれて、足の裏だけを描く画家はいないことでしょう。いたとしたらその画家は、よほど諧謔的であるか、皮肉屋なのでしょう。

でも人体としては、足の裏も、眉や目や鼻や口の形と同じほど重要な部分なのです。その部分がなくても肖像としては困りませんが、人体としては困るのです。西洋キリスト教はかなり顔かたちを上手に描き上げたキリスト教です。しかし、足が描けていないばかりか、足なるものの存在を忘れたキリスト教です。

では、聖書に書かれていながら、西欧キリスト教が注意を払わなかった教え、忘れ去られたために、人間としての全体の姿がゆがめられてしまった教えとは何でしょう。それは、人間は神に似せて造られたという、基本の基本、原則の原則です。

Ⅱ．　神に似せて造られた事実

人間が罪のある存在だというのは間違っていません。しかし、それよりも何よりも、人間の基本的姿、基本的な性質、人間の本性は、神に似ている者だということが真っ先に語られなければなりません。その事実がいったいどういう意味であり、それが人間の生活にどのように影響し、どのような役割を果たしているか、深く考えられ、正しく認識されなければなりません。

特に、人間が造り主である神に似せて造られという事実は、人間の宗教性あるいは宗教生活にどのような影響を与え、どのような意味とどのような意義を持っているのか、さらにどのような役割を担わされ、どのような機能を果たしているのか、深く、深く考察されなければならない主題です。

西欧の神学では、神の人間創造と人間の罪からほとんど一足飛びに、アブラハムの召しと選民イスラエル人とモーセの律法に進んでしまいます。モーセの律法の前、イスラエルの前、アブラハムの前の事柄には、ほとんど注意を払いません。ある意味でそれは当然です。旧約聖書は選民であるイスラエル人に与えられたもので、その民族から救い主は誕生したのです。聖書はイスラエル民族という選民を中心に書かれています。使徒パウロの働きによって、新しい啓示が公にされ、異邦人の救い、普遍的福音が明らかにされてさえも、その記述はあくまでもイスラエル民族からの視点で記されているのです。

ところが私たちはイスラエルには属さない異邦人です。イスラエル人を通して与えられた普遍的福音の恩恵には浴しますが、イスラエル人に向けて語られた聖書の多くの部分は、私たちにはなじみのないものであったり、関係のないものだったりします。それ無視して日本人に適用したりすると、とんでもない文化的軋轢や感情的軋轢を生じます。キリストの普遍的救いは、イスラエル民族の歴史的、地理的、文化的背景を通してもたらされたものであり、それらの背景と全く異なった文化背景の中で数千年生きてきた日本人には、非常に難解なものとなります。

そのイスラエル文化を背景にしたキリスト教の福音は、日本人にはなじまないのです。とくに、日本という国ができて以来、あるいは日本人が日本に住み着いて以来今まで、日本人は聖書を知らず、キリスト教の教えにも無知でした。日本人がイスラエル民族を知らないということ、聖書を知らないということは、ある意味でイスラエル民が他誕生する前の、様々な民族と同じだということであり、アブラハム以前の人々と同じ条件だということです。想像するときわめて野蛮で、無知で、宗教的にも混沌としていると判断しがちですが、実は、その時代の人々の中にも、メルキセデクのような立派な信仰者もいましたし、ヨブと呼ばれた信仰の巨人もいました。ノアもいましたし、ほかにも隠れた人々がたくさんいたことでしょう。そのような人々に似た人物が、日本の歴史の中にいたとしても不思議ではありません。

聖書も読んだことがなく、キリスト教に馴染んだこともない日本人が、世界でも最もキリスト教の精神に合致した生活をしていると言われるのは、いったいどうしてでしょう。東日本大震災の被害を受けた日本人たちが、なぜあのように整然とした態度をとり、暴動や略奪の類は皆無だったのはなぜだったのでしょう。１億２０００万人を超える人口を持つ国の犯罪総数が、ニューヨーク市ひとつのそれよりも少ないといわれるのは、どうしたことでしょう。日本には自動販売機が至る所にあり、農道には無人販売所がそこかしこにあるのはなぜなのでしょう。

アジア唯一のカトリック国であるフィリピンに、私も長い間住んでいましたが、その治安の悪さは私の説明の能力を超えて居ます。フィリピン人は大好きですが、カトリック教国が

もたらした悪弊には幻滅を感じます。その昔、日本がスペインの植民地にならなかったことに大いに喜びを感じます。

国民の大部分が聖書を読んだことがなく、キリスト教の教えにも接したことがない日本が、どうしてこれほど聖書の教えに近い生活をし、キリスト教諸国の人々よりもキリスト教の精神に近い生き方をいていると、キリスト教の強いイギリスの人たちに判断されたのでしょう。その答えは簡単です。日本人は聖書を持たず、キリスト教を信奉してはいませんが、聖書をお与えになった神、キリスト教のもととなった神によって造られたとき、その神に似せて造られたためです。（創世記１：26－27）

日本人の姿には、気高く、清く、正しく、愛と哀れみに富む、天地創造の神の姿が強く残っているのです。文字に書かれた律法は与えられていませんが、同じ神から与えられた心の律法を持っているのです。（ローマ２：14－15）その心の律法はモーセを通して与えられた文字による律法に先んじ、もっと基本的なものとして耐えられたものです。モーセを通して与えられた文字による律法は、基本的に、神の救いのために選び出されたイスラエル民族が、神の器としてふさわしい民族として育つように、教育と指導を与えるために与えられたものですが、心に記された律法は、人間が人間として生きるための基本として、基準として、導きとして与えられたものです。